

出羽三山信仰圏の地理学的考察

岩 鼻 通 明

【要約】 出羽三山信仰は東日本一帯に広く分布しており、各地に参詣講や末社、石碑が存在する。本稿は、出羽三山をめぐる山岳宗教集落とその勢力圏を考察した前稿をふまえ、地方史誌、民俗誌、民俗地図および聞き取り調査から出羽三山信仰に関する諸事例を収集し、その類型化を行なうことにより、出羽三山信仰がおりなす地域構造を考察することを目的とする。

各地の信仰形態を比較検討した結果、参詣者の年齢を主たる指標として、第一次と第三次にわたる信仰圏を設定することができ、出羽三山信仰は同心円的な圏構造を有していることが明らかになった。さらに、各信仰圏内においても、信仰形態の地域差から、いくつかの地域類型を設定することができる。

史林 六六巻五号 一九八三年九月

一 は じ め に—宗教地理学における信仰圏研究の意義

地理学において宗教現象を考察する視点として、その分布や伝播を検討する研究が従来から多く試みられてきた。^①

しかし、たとえばゼリンスキーの合衆国における諸宗派の分布論的研究^②においては、宗教は文化地域設定の一指標にすぎなかった。また、内田の真宗・曹洞宗の分布論的研究^③においても、その発展過程が考察の対象とされるなど、従来の宗教地理学においては宗教がおりなす地域構造の解明という視点が十分ではなかった。すなわち、単なる分布パターンや伝播過程にとどまらず、宗教の分布の内部に秘められた地域構造を探ることが宗教地理学の重要な課題となる。

宗教がおりなす地域構造として、まず教団組織が有する階層的な地域構造をあげることができる。内田は近江盆地にお

いて、寺院—報恩講組—組^キ—別院崇敬部下—教区—本山という重層的な連帯性の強い寺院共同体の形成されていることを指摘した。^④ 筆者も前稿において、在地修験(末派修験—蝕頭)—山内修験—本山という教団組織が有する階層的な地域構造として山岳宗教集落の勢力圏を考察した。^⑤

しかし、この地域構造は教団組織が編成した構造であり、いわば中心からの視点によつたものである。それに対し、個々の地域において宗教が受容される場合、さまざまな信仰形態の地域差が生じる。民俗学においてはこの信仰形態の地域差に着目し、信仰圏研究がなされてきた。この立場においては、個々の地域において受容された宗教の有する役割や意義が検討され、いわば周辺からの視点によつた地域構造の考察が行なわれる。

このように、宗教がおりなす地域構造の解明に際しては、従来の宗教地理学で行なわれてきた中心からの視点に立脚した研究に加え、信仰を受容した地域の側から逆照射した地域構造の研究、すなわち信仰圏研究が必要となる。この両方の視点に立脚した研究が統合されて、はじめて宗教がおりなす地域構造が明らかにするといえよう。

そこで、本稿においては、前稿での出羽三山の山岳宗教集落の勢力圏の考察を受けて、出羽三山の信仰圏について検討し、出羽三山の山岳宗教がおりなす地域構造の解明に努めたい。

① 宗教地理学の研究動向については、次の文献を参照された。

当麻成志「日本宗教地理学の提唱」人文地理13—4、昭36。

ソーパー、(徳久・久保田・生野訳)『宗教地理学』大明堂、昭

46。

シュヴィント編、(徳久・吉田訳)『宗教の空間構造』大明堂、昭

53。

Sopher, D. E., *Geography and religions, Progress in Human*

Geography, 5-4, 1981.

② Zelinsky, W., *An approach to the religious geography of the*

United States: patterns of church membership in 1952, A. A. A.

G, 51-2, 1961.

③ 内田秀雄「真宗の発展」人文地理10—5・6、昭34。

同「曹洞宗の発展」大阪学芸大学紀要8、昭35。

④ 内田秀雄「近江村落の宗教性」大阪学芸大学紀要15、昭42。

⑤ 拙稿「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」地理学評論56—8、昭58。

⑥ 前掲註⑤参照。

二 地理学・民俗学における信仰圏研究の問題点と課題

前章で述べたように、民俗学においては山岳宗教の信仰圏に関する研究が進められてきた。まず、宮田は各地の霊山の事例にもとづき、山麓の地域社会には地域共同体と密着した信仰形態が存在するのに対し、遠隔の地域社会には講集団という第二次的な信仰形態がみられるという二重構造の存在を指摘した。^①

さらに、続く論文で宮田は第一次・第三次にわたる同心円的な信仰圏の仮説を提起した。^② すなわち、第一次信仰圏は一日以内で登拝可能であり、対象となる山岳が遙拝できる圏域とし、その信仰は、水流分源、生産厩、祖霊神、山の神田の神信仰のいずれかに関わるとした。第二次信仰圏は遙拝不可能な地域で、参詣するにも途中で宿泊が必要であり、御師の配札圏となって代参講が盛んであるとした。第三次信仰圏は山岳との直接的なつながりが薄く、信仰集団が各自の属する地域社会を超越して連繫し、しばしばその山岳に対する宗教教団が組織されるとした。

この宮田の仮説そのもののオリジナリティは評価されるべきものであるが、圏域設定の指標には問題点を残している。たとえば、第一次信仰圏と第二次信仰圏の境界は、遙拝が可能かどうか、そして一日以内で登拝可能かどうかで設定されているが、この二種の指標による境界設定が常に合致するとは限らない。つまり、徒歩一日という行動半径は一定の距離として設定しうるが、遙拝可能な範囲は対象となる山岳の位置や標高により大きく変化する。^③ 例をあげれば、岩木山や筑波山のような平野部に位置する独立峰の場合は徒歩一日圏をはるかに超える遠方からも遙拝可能となる。

また、第一次信仰圏の特徴としてあげられた、水流分源、生産厩、祖霊神、山の神田の神信仰という四種の信仰も、第二・三次信仰圏に存在しない信仰とはいいがたく、むしろ山岳宗教に一般的にみられる信仰をあげたにすぎないといえよう。

さらに、第二次信仰圏が御師の配札圏となるという指摘も不十分で、山岳宗教集落が成立している場合、第二次信仰圏

の内側の第一次信仰圏も当然ながら御師の檀那場として勢力圏に組み入れられて配札が行なわれるのであり、御師の配札圏が第二次信仰圏特有のものであるとは認められない。

以上述べたように、宮田の信仰圏に関する仮説は圏域設定の指標にあいまいさを残しているが、その結果、以後の実証研究も単に同心円的な信仰圏の存在を指摘するにとどまっている。宮田の岩木山信仰に関する実証研究においても、問題設定として、岩木山が望見可能な旧南部領になぜ信仰が存在しないのか、また、岩木山麓の百沢には山伏が存在し、広域的な第二次信仰圏を拡大する条件を備えていたにもかかわらず、信仰圏が津軽に限られていたのはなぜかという点をあげながら、結論として岩木山信仰圏は各部落にかつて信仰的意味を持って存在したモリ山の重層的構造の上に成り立っているという指摘にとどまり、自ら設定した問題への解答は何ら示されていない。

宮田以降の実証研究として、まず宮本の加波山信仰に関する論文があげられる。宮本は加波山信仰の第一次信仰圏を大当講・総登りの行なわれる筑波・足尾・加波三山の周辺地域、第二次信仰圏を禅定講・神興渡御の行なわれる一層広範な地域（茨城県真壁郡・結城郡、栃木県芳賀郡など）として把握した。宮本は信仰形態の差異によって信仰圏を設定し、第二次信仰圏には山先達の介入が認められるとする。しかし、主な論点は禅定講・神興渡御の成立過程にあり、信仰圏は図示されていないため、現実に加波山信仰は同心円的な圏構造を有しているのか、さらに、大当講・総登りの行なわれる地域の外側に禅定講・神興渡御の行なわれる地域が存在するのか、あるいは第一次信仰圏内で禅定講・神興渡御も重層的に存在するのかわかるとは十分明らかではない。このように、宮本の研究においても、各々の信仰形態の分布が明確に把握されていないため、信仰圏の存在を指摘するにとどまっており、圏域が設定され図示されるまでには至っていない。

次に、牧雅子の筑波山信仰に関する論文があげられる。牧は筑波山信仰において、山麓の講のみられる地域を第一次信仰圏、お座替りの大祭に参詣する地域を第二次信仰圏、代参講のみられる地域を第三次信仰圏とする信仰圏を設定した。そして、筑波山を中心とする三重の同心円を描き、各圏域を設定しているが、論点はむしろ設定した同心円の圏域と実際

の信仰形態の分布とのずれの説明に中心があり、宮田の仮説を実証するという姿勢に欠けている。特に牧の設定した第二次信仰圏は講の存在しない信仰形態がみられる地域であり、代参講が盛んであるとした、宮田の設定した第二次信仰圏とは全く性格を異にする。要するに、牧の設定した筑波山信仰圏は宮田の仮説を単なる同心円の圏構造として継承したにすぎないといえよう。

また、西海は牧の筑波山信仰圏に修正を加え、第二次信仰圏は御六神講・対象をもたない大当講が分布し、筑波山の山容が視界にない地域に限られているとする^⑦。しかし、御六神講の分布は牧も図示しているように、ほとんどが第一次信仰圏内の山麓に分布し、第一次信仰圏内の講と同質とみなしたほうがよい。そして、筑波山と直接関係のない大当講の分布地域を第二次信仰圏とすることは中心となる山岳との関係から設定される信仰圏の概念と矛盾するため不適当である。

以上指摘したように、民俗学における山岳宗教の信仰圏研究は、信仰圏の形成過程および発展過程という歴史的側面への関心が強く、また、信仰の分布の把握よりも個々の信仰形態の民俗事例の考察が重視され、山岳宗教がおりなす地域構造としての信仰圏の理解に乏しかった。したがって、信仰の分布を把握し、その濃淡や地域差に着目して信仰圏を設定することが、地理学における信仰圏研究の課題となる。従来の地理学における山岳宗教の信仰圏研究は山岳宗教集落の勢力圏研究にとどまり、^⑧このような立場からの信仰圏研究は試みられなかった。

そこで、本稿においては宮田の仮説にもとづき、より精緻な圏域設定の指標を追求することによって地理学的な信仰圏モデルを再構築することを試みたい。本稿で研究対象とする出羽三山は広域的な信仰圏を有することが池上や宮田により指摘されており、^⑨筆者の前稿においても、^⑩その山岳宗教集落の勢力圏は東日本一帯に及んでいたことが確認され、さらに現在も東日本各地に信仰が残存することから、信仰圏研究のフィールドとしては最適の条件を備えている。

① 宮田登「山岳信仰と講集団」日本民俗学会報21、昭36。

② 宮田登「岩木山信仰―その信仰圏をめぐって―」（和歌森太郎編『津

軽の民俗』吉川弘文館、昭45）。

③ 山岳宗教において対象となる山岳が可視か不可視かという問題は信

仰の起源や形態に大きな影響を及ぼしていると考えられる。しかし、対象となる特定の山岳への信仰という空間認識が可視ということからのみ生じるのかどうかは不明であり、また、可視不可視という指標は主観的側面も大きく、実際に確認することは困難でもあるため、本稿における考察では除外しておきたい。

④ 前掲註②参照。

⑤ 宮本繁雄「地方霊山信仰の成立とその展開」（笠原一男編『日本における政治と宗教』吉川弘文館、昭49）。

三 出羽三山信仰の分布

出羽三山の信仰圏を設定するに際し、本章においては、その前提として出羽三山信仰の分布を把握したい。

筆者は前稿において出羽三山をめぐる「八方七口」の山岳宗教集落の勢力圏（江戸後期～明治前期）について検討した^①。その結果、羽黒山系の肘折は山形県最上地方、岩根沢は山形県内陸部、宮城、福島県、手向は東北・関東地方一帯、湯殿山系の七五三掛と大網は山形県庄内地方、新潟県、大井沢は山形県置賜地方、福島県会津地方、栃木県、本道寺は山形県内陸部、宮城、福島県および北関東に勢力圏を有していたことが明らかになった。

それに対し、本章では出羽三山信仰を受容した地域社会に存在する、講・末社・石碑を指標として、出羽三山信仰の分布の濃淡について検討したい。

まず、『日本民俗地図』^②より出羽三山を信仰対象とする講を選び出した（図1）。「日本民俗地図」は各県ごとの調査地点数が三十ヶ所前後であり、十分な講の分布は把握しがたい面もあるが、各調査地点の資料が活字化されているため、講の存廃や名称などを図示することが可能である。

この『日本民俗地図』の後を受けて、近年各県の教育委員会により、調査地点数を増加した新しい『民俗分布図』が続

⑥ 牧雅子「筑波山信仰の信仰圏」現代宗教2、昭55。

⑦ 西海賢二「筑波山と山岳信仰―講集団の成立と展開―」崙書房、昭56。

⑧ たとえば、その事例として、長野寛「山岳宗教（修験道）集落英彦山の構造と経済的基盤」駒沢地理15、昭54、があげられる。

⑨ 池上広正「東北地方に於ける山信仰―特にその信仰圏について―」宗教研究137、昭28、および、前掲註②参照。

⑩ 前掲第一章註⑤参照。

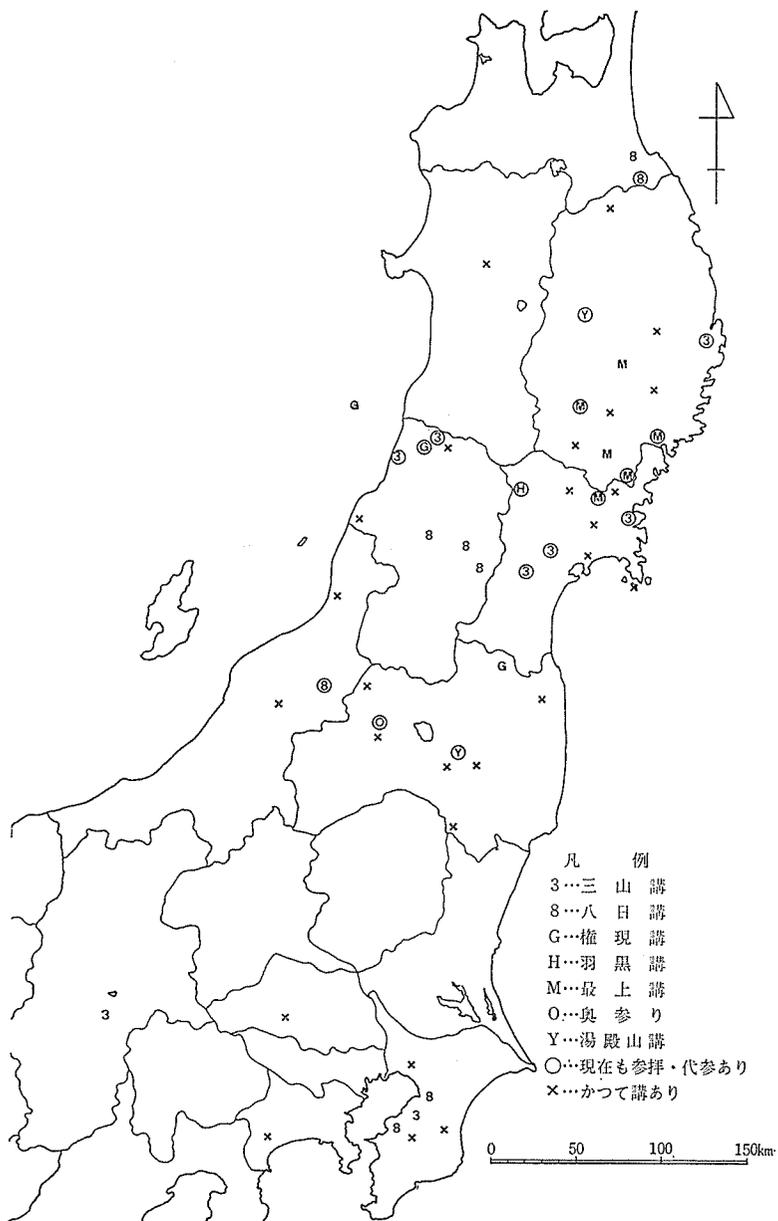


図1 出羽三山講の分布（その一）

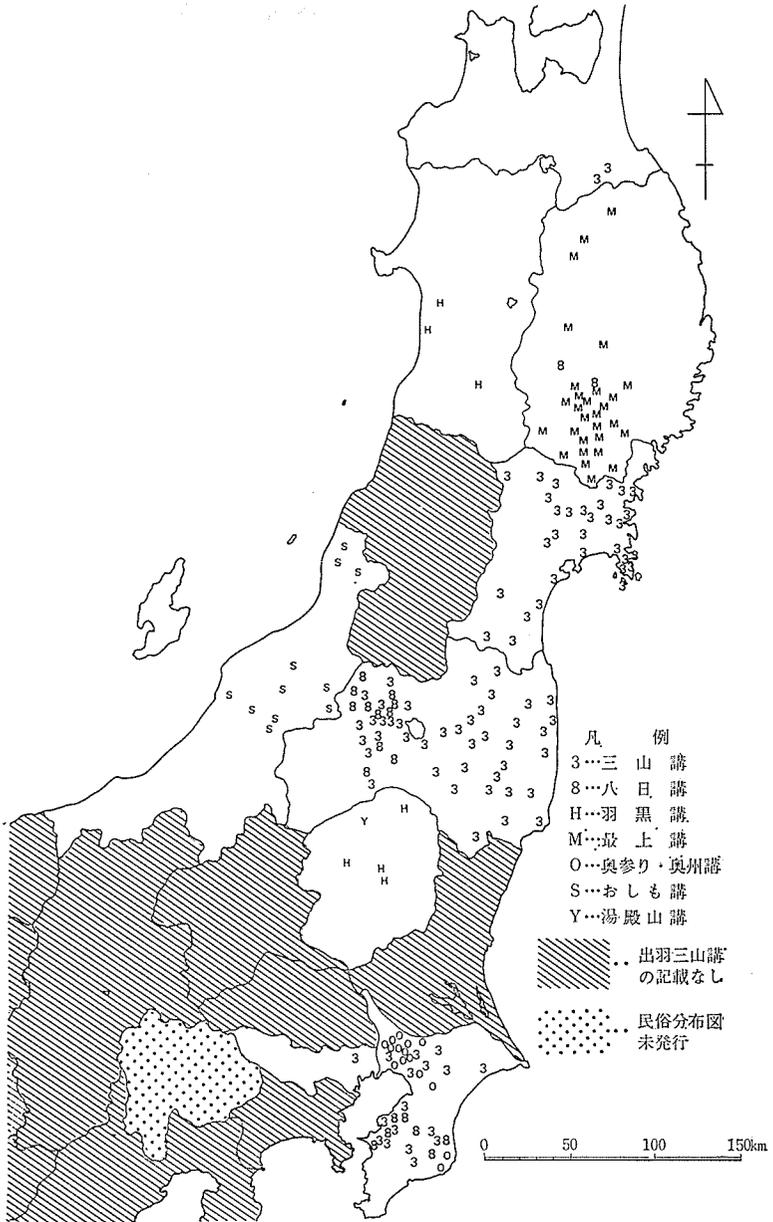


図2 出羽三山講の分布 (その二)

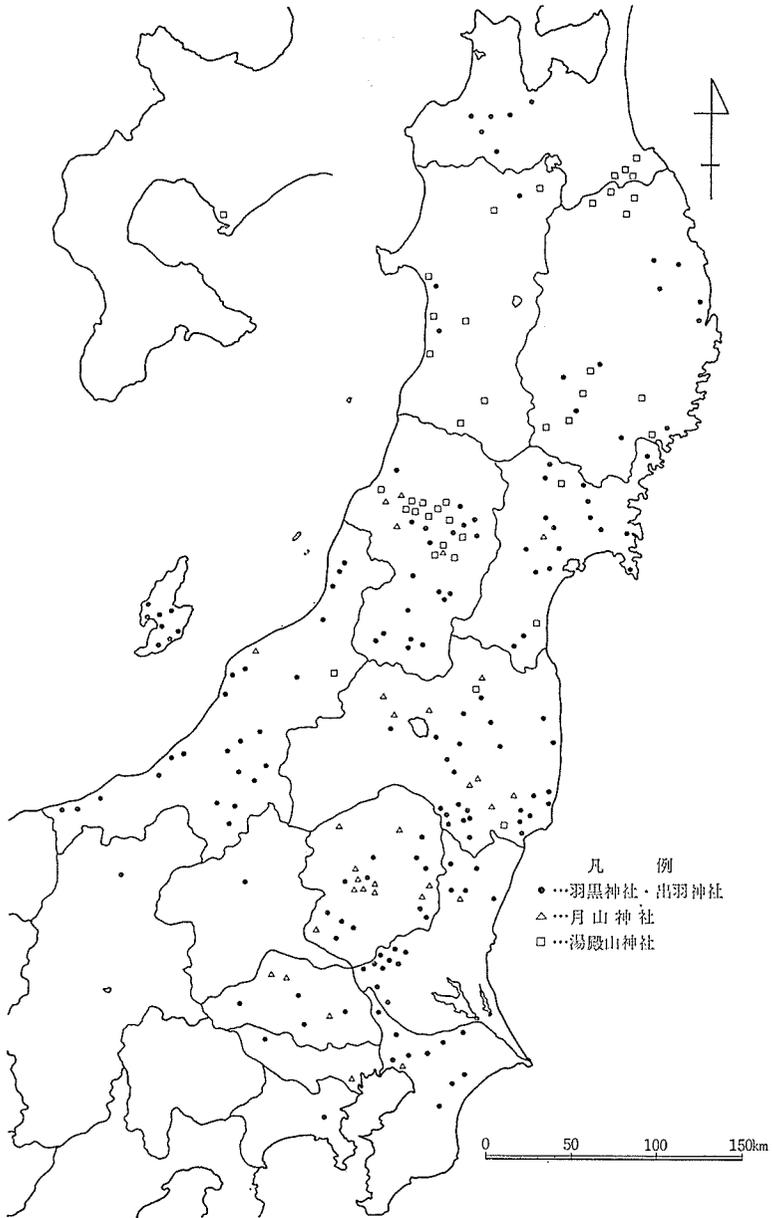


図3 出羽三山末社の分布

表1 出羽三山碑の分布

年号	県					山形				新潟	栃木	茨城	群馬	千葉	東京	埼玉	神奈川
	青森	秋田	岩手	宮城	福島	庄内	最上	村山	置賜								
元文以前(~1741)		1		1							3	2		3			
寛保(1741~ 44)											1						
延享(1744~ 48)								1									
寛延(1748~ 51)											1				1		
宝暦(1751~ 64)				1		1	2	2			1			4		1	
明和(1764~ 72)		1	3	1	1		5	1			1			1			
安永(1772~ 81)		2			1		5	1			4			3	1	1	2
天明(1781~ 89)			1		3		6				1	1		4			
寛政(1789~1801)		1	2	2	1	2	32	7			3			7		2	3
享和(1801~1804)			1				7	1			2			3			2
文化(1804~ 18)			15	12	3	9	4	37	31	2	11	3		4	1	4	3
文政(1818~ 30)		2	7	10	8	23	3	27	31	3	2	1				3	
天保(1830~ 44)	1	4	10	4	4	8		22	17	2	7	2	4	9	2	5	
弘化(1844~ 48)	1			2	2		2	6	4	1		3		2		1	
嘉永(1848~ 54)	1		6	7	6	6	1	18	16	5	5		1	9		2	
安政(1854~ 60)		2	6	3	4	6	2	4	5	1	3		1	7	1		
万延(1860~ 61)			1		1		1	1	2		1		1				
文久(1861~ 64)		3	5	5	5	5	1	3	4	1				3			1
元治(1864~ 65)				1			2	1						1	1		
慶応(1865~ 68)	1		1	3		6		3	2	2	5	1		1	1		
明治(1868~1912)	7	1	32	15	7	17	3	5	26	4	3	3		18	2	1	1
大正(1912~ 26)	2		11	3	4	3	2	1	1	2	1			11			
昭和(1926~)	2		5	1				1		1		3		38			
合計	15	17	106	71	50	86	21	187	151	24	55	19	7	128	11	20	13
うち三山碑	14	10	70	5	4	7	1	3	2	0	1	16	7	122	10	17	11
%	93.3	58.8	66.0	7.0	8.0	8.1	4.8	1.6	1.3	0	1.8	84.2	100.0	95.3	90.9	85.0	84.6

々と作成されている。それら各県の『民俗分布図』^⑤から出羽三山を信仰対象とする講を選び出し、図示した(図2)。ただし、山形県をはじめとして、出羽三山を含む山岳信仰や社寺参詣の講の分布が示されていない『民俗分布図』も若干みられ、また、『日本民俗地図』のように調査項目が一定していないため、広域的な分布の比較には不都合な面もある。

これら2枚の講の分布図から、東北地方、とりわけ、岩手、宮城、福島県には濃密に出羽三山信仰が分布し、また、新潟、千葉県にもかなりの分布がみられることが確認され、講の名称にも地域差が存在することが明らかになった。なお、これらの『民俗地図』においては、大正昭和初期の民俗が調査対象とされている。

次に、出羽三山の末社の分布について検討したい。出羽三山は明治初期の神仏分離によって三山神社となり、月山山頂には月山本宮、湯殿山山腹には湯殿山本宮、羽黒山頂には三神合祭殿として、出羽神社、月山神社、湯殿山神社が祀られている。これらの末社の分布を『全国神社名鑑』^④より拾い出すと、北は北海道から関東まで一都一道十四県にわたる広い範囲に拡散している(図3)。

末社ごとにその分布を比較検討すると、羽黒・出羽神社の末社は広範に分布しているのに対し、月山神社の末社は北東に、湯殿山神社の末社は福島県から北関東に偏在している。羽黒・出羽神社の末社の分布は羽黒山手向の広大な勢力圏に対応し、また、月山神社の末社の分布は羽黒山の伝統的な勢力圏である霞場の分布に対応し、出羽三山信仰における月山信仰の歴史的先行性を示唆している。一方、湯殿山神社の末社は湯殿山系の四ヶ所の山岳宗教集落の勢力圏にほぼ対応している。

ただし、この分布図は現代における末社の分布を示したものであり、明治初期の神仏分離や明治後期の神社整理の際に、社名変更や合併が頻繁に行なわれたため、実際に本末関係が存在するのかどうかは確認が困難である。

最後に、出羽三山の石碑の分布について検討したい。出羽三山碑は東北六県と関東七県および新潟、山梨県^⑥で、その存在が報告されている(表1)。建碑数は十九世紀に入って急増しており、幕末期の出羽三山信仰の隆盛をうかがうことがで

きる。

また、県ごとの建碑数では、山形、岩手、宮城、千葉県が多く、前述の講の分布との対応がみられる。

さらに、この石碑に関して、碑面に「湯殿山」とのみ刻んだ石碑と、「月山・湯殿山・羽黒山」と三山の名を刻んだ石碑の二種類が存在する。この「湯殿山碑」と「三山碑」の構成比を比較検討すると、各県ごとに明らかな差異が現われている(表1)。すなわち、宮城、福島、山形、新潟、栃木県においては、「湯殿山碑」が圧倒的多数を占めるのに対し、秋田、岩手県では「三山碑」がやや上回り、青森および関東諸県(除栃木)では「三山碑」が大多数を占めている。この分布の差異を生み出した要因としては、羽黒山系と湯殿山系の山岳宗教集落の勢力圏の重層関係をあげることができる。江戸時代に双方の勢力圏が重層して競合した地域においては、羽黒山系も競合を避けるために、出羽三山の奥の院としての湯殿山信仰を前面に出したことによって、石碑のほとんどが「湯殿山碑」になったものと考えられる。湯殿山系の勢力圏の及ばなかった地域においては「三山碑」が建てられたのである。

しかし、明治以降、羽黒山手向が出羽三山の祭祀権を独占するに至ると、石碑も「三山碑」が多く占めるようになり、また、それまでは「三山碑」においても、「湯殿山」が中央に刻まれていたのが、「月山」が中央に刻まれるように変化した。このように、出羽三山の石碑の分布と変遷の中に出羽三山の山岳宗教集落の勢力圏の動向を読みとることも可能である。

以上の出羽三山の講・末社・石碑の分布の検討によって、出羽三山信仰は東日本一帯に広く分布していることが確認された。しかし、その分布は、出羽三山に近接した秋田、青森県に希薄であるのに対し、遠く離れた千葉県に濃密な分布がみられるように、その分布の濃淡は必ずしも出羽三山からの距離関係で説明できるとはいえない。では、出羽三山信仰の分布の濃淡を規定している要因は何だろうか。

まず、人々の属する仏教の宗派との関連が民間信仰を受容する基盤としてあげられる。仏教の宗派によって、民間信仰

の存在形態が異なることは従来から指摘されている。⑦ 修験道と関係の深い真言宗と天台宗の信徒は山岳信仰の受容に積極的であり、また、禅宗の信徒も民間信仰を拒否はしなかった。しかし、「門徒物知らず」と称される浄土真宗の信徒や日蓮宗の信徒は民間信仰に対して排他性が強かった。出羽三山信仰の場合も、北陸の真宗地帯にはほとんど伝播していないし、近接しているにもかかわらず分布の希薄な秋田県も東北六県随一の真宗地帯である。

次に、山岳信仰や民間信仰相互の競合関係が考えられる。山岳信仰や民間信仰の神仏は諸々の御利益を有するため、信仰が重層的に存在する事例がしばしばみられるが、類似する御利益を持つ信仰は互いに競合する。出羽三山信仰は、作神、水神、祖霊神として、主に農民の信仰を集めたが、信仰の競合するような規模の霊山が乏しい地域へ展開したことが想定される。

一方、羽黒山系と湯殿山系の山岳宗教集落の地方における末端組織も信仰の伝播に大きな役割を果たした。羽黒山手向においては、各院坊が在庁と称して各々の霞場内の羽黒派修験を支配した。これらの末派修験は里山伏と呼ばれ、寺院の少なかった東北地方では、村落内の宗教生活において重要な立場にあった。この里山伏が村落において、出羽三山の講を組織する中心となり、参詣の際には山岳宗教集落まで先導する里先達を勤めたのである。

近世前期には徳川幕府から公認された本山派と当山派の二大修験勢力が東北地方に進出し、各地で在地の羽黒派修験との間に紛争が生じた。⑧ いずれの修験勢力を優遇するかは、各藩の宗教政策により異なり、羽黒派修験が排斥された藩領においてはお出羽三山信仰の分布も希薄である。⑨

明治の神仏分離により、明治5年に修験道は禁じられ、末派修験の多くは神社の神主となり、次第に国家神道の枠に組み入れられて、出羽三山の地方支配組織は崩壊に至った。ただ、各県の宗教政策により、神仏分離の徹底度にも差異があり、明治以降の出羽三山信仰の分布の濃淡を規定したと考えられる。明治時代に三山神社は神式の拝詞を作成したが、今なお、伝統的な仏式の拝詞を唱えて登拝する信徒も多い。⑩

以上、出羽三山信仰の分布の濃淡を規定している要因について検討したが、次章ではこの検討をふまえて、東日本各地に存在する出羽三山信仰の諸事例について考察を進めたい。

- ① 前掲第一章註⑤参照。
- ② 文化庁編『日本民俗地図Ⅲ(信仰・社会生活)』国土地理協会、昭47。
『青森県民俗分布図』昭51。
『秋田県民俗分布図』昭54。
『岩手県民俗地図』昭52。
『宮城県民俗分布図』昭52。
『山形県民俗地図』昭54。
『福島県民俗分布図』昭48。
『新潟県民俗地図』昭54。
『栃木県民俗地図Ⅱ』昭54。
『千葉県民俗地図』昭52。
『埼玉県民俗地図』昭54。
『東京都民俗地図』昭55。
『長野県民俗地図』昭47。
『静岡県民俗地図』昭53。
『富山県民俗分布図』昭52。
『茨城県民俗分布図』昭46。
以上は各県教育委員会編による。
『神奈川県史、各論編5、民俗』昭52。
『群馬県史、資料編26、民俗2』昭57。
以上は付図として添布。なお山梨県は未発行。
- ③ 『全国神社名鑑 上、下』全国神社名鑑刊行会、昭52。
- ④ 前掲第一章註⑥参照。
- ⑤ 表1の作成に際しては、以下の文献を参照した。
青森県・『路傍の石 名久井七村』昭43。
秋田県・『由利町民俗誌』昭52、『石造紀年物調査報告書(大館市)』昭49、『五城目町の石造記念物』昭50、他。
岩手県・『路傍の信仰(大船渡)』昭52、『福岡の石碑』昭51、『平石の石碑』昭49、『千厩町の古碑』昭54、他。
宮城県・『村田町史』昭52、『小野田町史』昭49、『矢本町史二』昭49、『道ばたの碑(白石市)』昭49、他。
福島県・『いわきの講と野仏』昭51、『猪苗代湖北民俗誌』昭48、『猪苗代町史民俗編』昭54、他。
山形県・『出羽三山碑』昭52、『置賜文化53』昭48、『出羽文化史料』昭22、『郷土の民俗(白鷹町)』昭44、他。
新潟県・『朝日村の民俗』昭52、53、『福島潟』昭45、『加茂市史』昭50。
栃木県・『下野の野仏』昭47。
茨城県・『さしまの民俗』昭52、『筑波山周辺の民俗』昭44、『茨城の民俗8』昭44、『鹿島町史2』昭49、他。
群馬県・『尾島町の石造遺物』昭53。
千葉県・『佐原の民俗』昭51、『野田市金石資料集』昭42、『銚子市史』昭31、『鎌南町史』昭44、他。
東京都・『清瀬市史』昭48、『小平町誌』昭34、『瑞穂町文化財調査報告2』昭47、他。
埼玉県・『入間東部の石造文化財』昭51、『川越の石仏』昭48、『越

谷市金石資料集』昭44。

神奈川県・『石仏調査報告書―さがみはらの文化財』昭53、『城山町の石造文化財』昭50、他。

なお、山梨県においても『上野原町誌下』によれば、出羽三山碑が九基確認されるが紀年が不明であるため、表1からは除外した。

⑦ たとえば最近の研究として、中川正「集落の性格形成における宗教の意義―霞ヶ浦東岸における二つの集落―」人文地理35―2、昭58、をあげる事ができる。

⑧ 本山派は郡ごとに年行事を置いて末派修験を支配する体制をとり、郡内の羽黒派修験をも支配下に入れようとしたために霞争い起きた。羽黒派も本山派に対抗して、各地に蝕頭を置く支配体制をとった。南部藩における事例として、次のような文献がある。

森毅「近世修験道「霞」知行の形成」奥羽史談61、昭48。

同「修験道に於ける「霞」―「且那場」職の展開」盛岡短大研究報告24、昭48。

同「修験所職の展開と山伏改め」盛岡短大研究報告30、昭54。

四 出羽三山信仰の諸形態

村落社会における出羽三山の信仰形態については、宗教社会学や民俗学の立場から調査研究が行なわれている^①。しかし、それらの研究の対象地域は一部に限られており、また、その信仰形態を出羽三山の信仰圏の中に位置づける試みはなされていない。

そこで、本章においては、前章で確認した出羽三山信仰の分布する地域における出羽三山の信仰形態の諸事例を、民俗誌および地方史誌類から収集し、筆者の聞きとり調査の事例も交えて、各県ごとに比較検討したい。その際、出羽三山信

伊達藩における事例は、『宮城県史12』昭36、参照。

米沢藩における事例は、戸川安章「山岳信仰と羽黒修験と米沢と」置賜文化53、昭48、参照。

⑨ 圭室文雄『江戸幕府の宗教統制』評論社、昭46、によれば、水戸藩では早くから寺社整理が行なわれ、羽黒派修験や湯殿山行人は追放されたため、出羽三山信仰は希薄である。一方、出羽三山参詣を制限した藩もみられる。藤田守「米沢の修験道史略記」置賜文化53、昭48、によれば、米沢藩では享和三年に堂社、供養塔、石仏類の新建築禁令が出され、寛政九年以降たびたび、伊勢参宮、柳津虚空蔵、湯殿山参詣の禁止令が出されている。また、新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、昭57によれば、相馬藩では元禄九年、家臣の三山参詣を禁止し、三春藩でも貞享二年、湯殿山参詣に関する規定を設けたという。

⑩ 圭室文雄『神仏分離』教育社、昭52。

安丸良夫『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈―』岩波書店、昭54。

⑪ 戸川安章『出羽三山修験道の研究』佼正出版社、昭48。

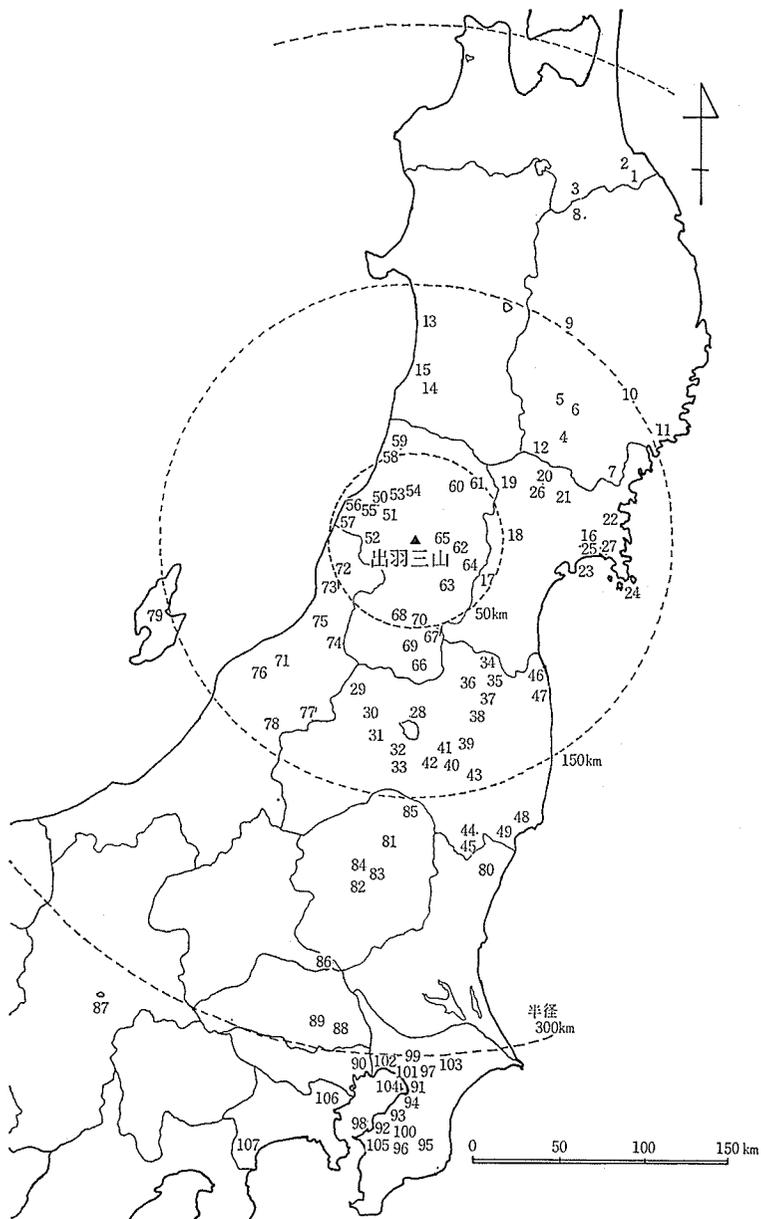


図4 出羽三山信仰の諸事例の分布 (数字は事例番号に対応)

表2 青森県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
2	八戸市	石手洗	八日党	毎月8日 行屋で酒食		月山	『日本民俗地図』72
3	三戸郡三戸町	泉山			泉山月山神社 別当が 先達	出羽三山	図き取り '80

仰が村落社会において、諸々の民間信仰の中でいかなる機能を果たしているのかという点を中心に考察を加えたい。なお、各事例の位置は図4に示した。

a 青森県

〔事例1、三戸郡階上町田代〕

出羽三山へお山参りに行った人たちが八日党といつて、六月八日、十二月八日に講を開く。以前は行屋に毎月旧暦八日に、およつか、おこもり、ぎょうやなどの名で参集したが、今は年二回になった。おこもりに行く人は前日から風呂に入って身を清め、精進をして七日夕方米などを持って集まる。一晩中、お神酒あげをして神様を拝み雑談する。八日夕方解散した。導師は仲間うちから出て、朝昼晩と祭文をあげて拜む。^②

青森県における出羽三山信仰は、民俗事例の分布をみると、南東部に偏在している(表2)。八戸藩の藩日記によれば、寛文九年(一六六九)以降、出羽三山参詣の記録がみられるという。^③津軽地方には岩木山信仰、下北地方には恐山信仰という競合する山岳信仰が存在するため出羽三山信仰は希薄であると考えられる。

また、三戸郡三戸町泉山では、産土神である月山神社の奥の院が名久井岳にあり、岩木山の初参りと同様に、男子七歳の初参り儀礼が存在する。^④岩木山から離れた地方では、岩木山に擬した山にお山カケをする習慣があり、^⑤それと同様に、山形県の月山から遠距離にあるため、月山神社を勧請して名久井岳を月山にみだてて登拝を行なっているものと解釈できる。

八日党という講の名称も毎月八日に講を開くことに由来するものであり、出羽三山参詣よりも講の集會が重要となっている。講員は出羽三山参詣者に限定され、同信的結合の強い性格を有している。

b 岩手県

〔事例4、水沢市〕

最上詣りは地域ごとに十人内外が講を組み、ひさまでの長さの白い着物に白い股引きをはき、三度笠にわらじという装束で、着物は祖父、父、息子と伝承されたものもあり、背中には巡礼先の大きな印が捺してあり、三度笠には地域を示して、たとえば「胆」

表3 岩手県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
5	花巻市	木蕨	最上講	同行順番の振まい		羽黒山、月山、鳥海山 7月	『日本民俗地図』'72
6	和賀郡東和町	倉沢	最上講		同行を組む	出羽三山、鳥海山	『日本民俗地図』'72
7	東磐井郡藤沢町	大籠	最上講			出羽三山、鳥海山	『日本民俗地図』'72
8	二戸郡福岡町	上斗米	月山講	毎月15日 別当の祈禱と酒食		上斗米月山神社	『日本民俗地図』'72
9	紫波郡矢幅町	煙山林	湯殿山講	4月8日 精進料理	湯殿山に参った人		『日本民俗地図』'72
10	遠野市	土淵	お山かけ			出羽三山	『日本民俗地図』'72
11	大船渡市	赤崎浦	八日現講(権現講)	3月、11月8日 初戦の折禱と酒食	くじでまわり講以上の男	出羽三山	『日本民俗地図』『大船渡市史4』'79
12	一ノ宮市	本寺	羽黒三山講			旧7月の農閑期	『日本民俗地図』'72

などと墨書していた。羽黒山では胆沢は双林坊というように地域ごとに宿坊が決まっていた、欲待され山案内された。ウ(卯と丑)の年は御縁年といって殊に参詣者が多かった。出発前日には白装束で鎮守に集まり、近隣部落の各神社を回ってオンタマイリをした。家族は本人が帰宅するまで蔭膳を供え、鳥海山や湯殿山をかける前日には隣近所にも手伝ってもらって水ゴリをとりオンタマイリをした。最上詣りは信仰に加えて途中の名所旧蹟の見学と稲作先進地の農事視察も兼ね、最上詣りが縁で、稲の新品種が紹介された例もある。帰宅すると出発前と同じようにお礼詣りをして鎮守に二、三日間籠り、神楽をあげて神意を慰め、神恩を感謝し、一同直会をして散会した。^⑥

岩手県における出羽三山信仰は「最上詣り」の形態が一般的である(表3)。「最上詣り」とは出羽三山と鳥海山の双方に参詣する形態であり、岩手県においては石碑も、出羽三山碑と鳥海山碑が並立している場合が多い。北上市と江刺市に残る、江戸～明治期の出羽三山参詣記録によれば、必ず鳥海山に登拝した後に出羽三山に登拝している。^⑦また、帰途には山形や仙台の城下町に立ち寄っている。庄内の農業先進地の視察と同時に、城下町では仏壇や鋳物をはじめとする諸々の都市的生産物を購入して帰ったものと考えられる。^⑧出羽三山参詣は信仰の旅のみならず、文化経済交流の契機としての役割も果たしていたのである。

岩手県内には岩手山や早池峰山などの山岳信仰が存在したが、信仰圏の狭いローカルな信仰にとどまり、むしろ漁業神としての金華山講や金毘羅講・火防の古峰原講、さらには伊勢講や善光寺参りといった遠距離参詣が盛んである。^⑨その中で、出羽三山は農耕神として鳥海山と同格に位置づけられていたのである。

また、参詣前後の精進がきびしく、同行者で講の集会を開く事例の多いことは同信的結合の強さを示すものであるが、反面、参詣期間中は家族や近隣の者も精進をするという点には共同体的結合も存在し、両者の中間的な信仰形態であるといえよう。

秋 田 県

〔事例13、由利郡岩城町〕

羽黒講は女性の集まりで、羽黒山から掛軸をもらってきて、各ムラごとに数人が集まって拝む。四～五年に一回、羽黒山に参る。羽黒からは毎年春先にお礼配りが来る。昔は米を渡したが、今は数百円を包む。^⑩

秋田県には出羽三山信仰の民俗事例はあまりみられない。県別の出羽三山参詣者数調査でも、出羽三山に近接しているにもかかわらず少数である。^⑪しかし、羽黒山参りは盛んであり、しかも女性の参詣が中心である(表4)。

山岳宗教においては、江戸時代は聖域圏は女人禁制であったが、準聖域圏の里宮や女人堂までは女性の参詣が許されたため、山岳を遙拝し、女人往生を祈願する講がしばしばみられた。出羽三山においても、羽黒山参りの女人講の形成は、手向の御師の布教が契機になったと思われるが、秋田県には唐松講などの女性の講が多く存在することも、女性の羽黒山参りの盛行の基盤となっていたのであろう。

秋田県内の山岳信仰としては、北部に大平山信仰、南部に鳥海山信仰があり、男性の参詣講としての出羽三山講はこれらと競合し、分布は希薄であった。ただ、江戸時代には湯殿山開山の縁年である丑年には百人講や五百人講を組んで、秋

表4 秋田県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
14	由利郡		羽黒講		初老の主婦が当番で参る	羽黒山	相沢金次郎『郷土の民俗』'78
15	由利郡西目町		羽黒語り		女性	羽黒山に生涯2度参る	戸川安章『羽黒山二百話』'72

田藩からも出羽三山参詣が行なわれたという。¹³⁾

d 宮 城 県

〔事例16、桃生郡河南町〕

羽黒山は比較的近距离にあり、山伏の出入りも多かったから、各地区に多くの三山講が組織され、毎夏、山伏の先達により白衣の三山詣りがなされた。出立には家族ともども厳重な精進潔斎が求められ、三山登山の日には留守宅に講員が集まって、注連を回した中に置かれる水桶の水を浴びて安泰を祈った。帰ると鎮守の宮などに参詣し、そのむねを神に報告し感謝した。登山者は帰宅後、山のことは一切語られぬタブーがあり、もし話せば神罰を受けるものとされた。また、参詣者の股をくぐれば風邪をひかぬ等の伝承もある。三山碑、ことに湯殿山碑は各地にみられるが、講員全部が参詣し終った時や、その他特別に祭りが行なわれた際等に建てられたもので、庚申碑などちがって大きなものが多い。¹⁴⁾

宮城県においては、北部には岩手県と同じく「最上講」の形態も残存するが、大部分は出羽三山のみに代参を送る講が一般的である（表5）。

また、参詣者が出羽三山のことを他人に語ってはいけないうタブーには同信的結合の強さが示されている。県内にある金華山の信仰は漁業神としての性格が強く、御利益が異なるため、競合する山岳信仰がなく、出羽三山がとりわけ崇敬を集めたことは、前述の事例に述べられている石碑の大きさにも現われている。

なお、現在宮城県には、大和教、^{やまと}大和教団という出羽三山信仰を基盤として派生した新興宗教の教団組織が存在し、夏期には出羽三山参詣を実施している。¹⁵⁾第二章で述べた、宮田の信仰圏仮説によれば、¹⁶⁾新興宗教の教団組織は山岳との直接的な関係が薄い第三次信仰圏においてみられるとされた。しかし、宮城県内におけるこれらの教団組織の成立事情を探究すると、山岳宗教集落の衰退にともない師檀関係が弱まった際に、在地の末端組織の宗教者が新たな自己中心の教団組織

を再編成したことが認められる。したがって、新興宗教の教団組織は山岳宗教集落の御師配札圏の外側に展開したとみるよりはむしろ、旧来の御師配札圏という基盤にもとづき、それを蚕食することによって、新たな組織を編成したものとみることが期待される。

表5 宮城県における信仰事例

事例	市 町 村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出 典
17	名取郡秋保町	馬 場	出羽三山講		若者契約 男3, 4人 で代参		『日本民俗地図』'72
18	黒川郡大和町	沢 渡	三 山 講		代参制	7月29日	『日本民俗地図』'72
19	玉造郡鳴子町	鬼 首 野	お羽黒講中			羽黒山 徒歩往復1週 間	『日本民俗地図』'72
20	栗原郡築館町	黒 瀬	坡上三山講				『日本民俗地図』'72
21	登米郡迫町	古 宿	最上三山講		7戸		『日本民俗地図』'72
22	本吉郡志津川町	戸 倉 浜	三 山 講				『日本民俗地図』'72
23	桃生郡鳴瀬町	宮 戸 島	羽黒三山講		世帯主中心		『日本民俗地図』'72
24	牡鹿郡牡鹿町	細 地 島 渡 長	湯 殿 講		村の人たちが毎年交代 で参拝		『日本民俗地図』'72
25	桃生郡矢本町		三 山 講		世話人が募集		『矢本町史2』'74
26	栗原郡築館町		三 山 講	12月8日、権現さまの おまつり	太田区東12戸 今は希 望者	羽黒三光院	『築館町史』'76
27	石 巻 市	新 橋	三山大神教会		信徒、希望者	三山登拝	『石巻市史2』'56

e 福島県

〔事例28、耶麻郡猪苗代町新在家〕

湯殿山講は旧七月九日から三日間をお山の日と定めてある。部落の春会議に抽選で代参者二人を決め、代参者は前日から火断ちといつて火に通した食事をとらず、飯を食べる場合も一度水にくぐらせた。午後、法印に参ってお敷いを受け、御幣を二体いただし、一体を屋根に、もう一体をコリ場とする川端に立て、コリをとって潔斎する。出発前には鎮守に参り、行衣、白脚絆、白足袋、草鞋、白冠、着ごぎ、菅笠、金剛杖のいでたちで旅立つ。十日はお山かけの日で、留守家族は早朝鎮守参りをして、お山無事を祈り、部落の各戸も鎮守に参って無事帰村を願ひ、留守宅を慰問する。留守宅では、なまぐさ一切抜き酒肴でもてなす。この朝は親戚近所で馬の朝草を刈って留守宅に届ける。これはお山かけの家では、山の草に鎌の刃を向けるとお山の怒りにふれて山が荒れるからだとか、神さまの足を刈りとるので草を刈ってはならないからだなどという。朝草を出した人々には当家で赤飯を出す。翌日、無事帰村すると、法印に参って日をかえしてもらふ。お山かけの日をあげるといふ。そして、先に受けた二体の御幣を鎮守に納めて、湯殿山の祈禱札を各戸に配る。^⑩

福島県における出羽三山信仰は、会津、中通り、浜通りの各地方ごとに多様な形態がみられ（表6）、講の名称も「奥参り」、「権現講」、「お福田講」等の様々な呼称が存在する。

会津地方においては、成人饗礼の山岳登拜として、山形県境の飯豊山参詣があり、また、柳津虚空蔵の「十三まいり」の信仰もみられ、出羽三山信仰は成年層、戸主層の信仰となっていた。^⑪ 会津盆地では飯豊山を「前山」、三山を「奥」と呼んだといふ。^⑫

中通り地方においては、安積郡では「伊勢に七度、熊野に三度、奥の御山に九度」といい、生涯に必ず出かけるものであったといふ。^⑬ 一方、三春町では、二十歳前後に三回お山をかけると穀に不自由しないといふ、有志で奥参りに出かけ

表6 福島県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	議員と参詣者	参詣場所と時期	出典
29	耶麻郡西会津町	奥川 弥平四郎	八田講	年1回 11月17日			『日本民俗地図』'72
30	河沼郡会津坂下町	青木	奥参り		一生に2回 成人が多い		『日本民俗地図』'72
31	大沼郡会津高田町	勝原 西勝	湯股山講		同行者で組織して参詣		『日本民俗地図』'72
32	大沼郡本郷町	舟子	八日講	正月八日	成人 義務代参制	お盆前後	『舟子と桑原』'73
33	大沼郡本郷町	桑原	八日講	正月八日	成人 義務代参制	お盆前後	『舟子と桑原』'73
34	伊達郡梁川町	八幡	お福田講 (権現講)	旧正月24~25日 ムラ	戸主10~30人が7組		『日本民俗地図』'72
35	伊達郡霊山町	中瀬	三山講		200人前後 世話人が 募集	7月末 羽黒宮田坊	聞き取り '80
36	福島市	瀬上	奥のお山		講中で参詣	7月17日	『福島の民俗Ⅰ』'80
37	福島市	松川町 沢金	羽山ごもり	託宣の中に三山の神の 名が出る			国立民族学博物館ビデ オテープ '75
38	安達郡安達町	黒沼		12月におこもり、もち つき	神主が世話人として募 集	北西の山に三山を祀る	聞き取り '80
39	郡山市					8月8日に信夫山にか わりに参拜	『郡山市史7』'69
40	安積郡		権現講 (奥参り)	前年の代参者宅で掛軸 に餅を供える			『安積地方の民俗』'67

41	安根郡逢瀬町	多田野 別		春に土木工事後くじ引 き	ムラ中のほとんど4～ 5人が代参		『日本民俗地図』'72
42	岩瀬郡長沼町	長沼 沼	山の神講 (お山講)	旧2月10日、10月10日	若組、若者通	明治以後は那須山にお 参り	『日本民俗地図』'72
43	須賀川市	塩田 田	奥羽三山講				『日本民俗地図』'72
44	東白川郡境町	羽黒山 山				山頂に出羽神社がある	聞き取り '80
45	東白川郡矢祭町	内川 川	奥参り講		20人1組で5人代参		『日本民俗地図』'72
46	相馬市		奥まいり (三山講)		羽黒派修験が世話	8月8日をお山しまい 研究'63	岩崎敏夫『本邦小祠の 研究』'63
47	相馬郡鹿島町	川子 子	奥のお山講 (出羽三山講)		代参を送る		『日本民俗地図』'72
48	いわき市	鹿島 田	湯殿山講 (奥無尽)		生涯に一度30歳をすぎ たら必ず行く		『いわき市史7』'72
49	いわき市	関田 田	奥参り		30人、年6人代参5年 で解散	歩いて1ヶ月	『勿来地方の民俗』'66

たという。また、郡山市日和田地区でも、戦前は二十歳(兵役)までに^②出羽三山に三回登拜することを強制していた。このように成人儀礼としての出羽三山参詣もみられた。

浜通り地方では、出羽三山参詣は伊勢参りと同じく生涯に一度は必ず行くものとする所が多い。伊勢講は戸主層で組織され、伊勢参りをすませた者は寄り合いでも上座に坐ったというが、^③出羽三山参詣はそれほどの権威づけはなかった。

また、福島県においても近在の山を出羽三山にみたてて、分霊を勧請して参詣を行なう例がみられる。たとえば、福島市信夫三山には出羽三山が勧請され、出羽三山まで参れない場合は信夫三山に参詣するという風習がみられた。^④中通り、

浜通り地方で盛んな羽山信仰においても、出羽三山が勧請されている例がみられ、前述の青森県三戸郡の月山参りや模擬岩木山と同じく、遠隔地では勧請した分霊に参詣する信仰形態が存在する。

f 山 形 県

山形県下における出羽三山信仰は、庄内、最上、村山、置賜の各地方ごとに多様な展開がみられる。そこで、各地方ごとに事例をあげて検討したい。

〔事例50、鶴岡市民田〕

七月一日から八月一日にかけて、月山、鳥海山の山参り代参が行なわれた。上のお山は出羽三山、下のお山は鳥海山をいう。昔はくじで代参人を決め、代参人は精進料理を食べ、小川の流れて一週間の水ゴリをとり、おあがりをして白装束に身をかため、山参りに出かけたものである。代参人は虫札、松の葉、しゃくなげの枝を持ってきて全戸に配り、各家では水田の水口に虫よけのお守りとして立て、豊作を祈ったものである。今は車を利用して山参りするようになった。

庄内地方には出羽三山に関係する多様な信仰形態が重層的に存在する。まず、最も一般的にみられるのは「お山参り」と称される形態である(表7)。事例にも示したように、月山と鳥海山の双方に代参者を送る。ただし、岩手県の「最上詣り」は同じ代参者が鳥海山と出羽三山の両方に続けて登拝したが、庄内地方では、同時に双方の山に別々の代参者を送る。また、土檀那と称される羽黒山信仰が存在する。この土檀那は属人的血縁集団であるマキごとに羽黒山の院坊から午玉札を受けて、春秋の祈禱をもらう信仰形態である。一方、近世の羽黒修験の入峰儀礼が明治以降は三山神社の行事となり、七月十五日の花祭り、八月三十一日の八朔祭り、十二月三十一日の松例祭には近在の人々が講を結成して多く参加するようになった。この羽黒講は主として女性の講である。

それに対し、鶴岡市堅苔沢では湯殿山の二月山の登拝が行なわれていた。このように、庄内地方では、月山、羽黒山、

表7 山形県庄内地方における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
51a	東田川郡柳引町		月山参り		2～3人がくじで代参	月山, 7月	『柳引町史』'78
51b	同	上	八坂講	祈禱, 飲食夜ごもり	最近は個人的	手向八坂神社春秋2回 3日間	同 上
51c	同	上	花祭り 八朔祭り		婦人 若い男女		同 上
51d	同	上	大洞講	祈禱後なおらい	大せいで行く 女の人 が多い	注連寺, 年1回	同 上
52a	東田川郡朝日村	荒沢	湯殿山詣り		自願, 5～6人	毎年旧6月15日	『荒沢の民俗』'56
52b	同	同上	八朔祭り		嫁入り前の娘 若い男	羽黒山, 夕方参拜, 翌 朝下山	同 上
53	東田川郡余目町	田谷	お山まいり	3月にくじで4年間の 代参者きめ	16軒で代参2人	月山, 鳥瀬山 7月末 の土用をかける	聞き取り '80
54	東田川郡余目町	廻館	三山講		有志, 156戸中44戸5 人代参	手向, 星野徳泉が配札	柳川啓一, 註二⑨ 聞き取り '80
55a	鶴岡市	田川	上の山講	はばきぬぎをかねて講	成年以上の男子	月山, 下の山は鳥瀬山, 夏	『日本民俗地図』'72
55b	同	同上	羽黒講	毎月15日に講, モチつき	若妻や娘2～3人	羽黒山花祭り	同 上
55c	同	同上	権現講	1月17日, 掛軸をかけ 親遠く	成年以上の男子	湯殿山	同 上
56	鶴岡市	大広谷	羽黒講		既婚婦人 2人代参	花祭り	『庄内大谷の民俗』'66

(整理) 鶴岡市神社の歴史と民俗

57	鶴岡市	堅吉沢	八日講			湯殿山	2月2日	『出羽三山の信仰』77
58a	酒田市	宮野浦	権現講	1月8日、代参者名で酒宴	男の若衆	月山		『日本民俗地図』72
58b	同	同上	八坂講		7組18人 2人代参	手向八坂神社		同
59a	酒田市	本橋	三山講		全戸加入、8組2人代参	7月下旬に門田、京屋と合同で		『日本民俗地図』72
59b	同	同上	八坂講	参籠		手向八坂神社	春秋2度	同
59c	同	同上	大綱講			注連寺		同

湯殿山のそれぞれに対する参詣講が成立している。

さらに、手向橋本坊の祀る八坂神社の講や、七五三掛注連寺、大綱大日坊の女人講など、山岳宗教集落への参詣講もみられる。

最後に、庄内地方にみられるモリの山信仰についてふれておきたい。モリ山とは平地に近い低山のこと、人が死ぬとその霊は三十三回忌まではモリ山にとどまり、年忌があけると月山に登るといふ。そして、七月十三日夜には、月山本宮の西にある採燈壇に柴をつんで採燈護摩を修し、山頂から野口までの王子社の神人もこの火をみると、かがり火をたく。山麓の村々ではこの火をみると門火をたき、精霊を家の仏壇に迎え入れるのである。このように、庄内地方における月山信仰は祖霊神的性格を濃厚に有しているといえよう。

〔事例60、新庄市〕

三山参詣は最上川沿いに下り、狩川から羽黒山に向かう。参拝がすむと手向の桜林坊に泊まる。翌朝未明に起きて月山をかけるが、精進が至らないとお山が荒れて登れなくなるといふ。最後に湯殿山をおがむ。もらってきたお札は神棚に納めるが、田んぼに

表8 山形県内陸部における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
61	最上郡最上町		お山参り	旧12月8日にお行	男子15歳の初まいり	お盆近く徒歩1週間	『羽前小国郷の伝承』 80
63	上山市		御山参り		若衆	夏季豊開期	『上山市史』75
64	山形市	高沢	八日講	正月20日と2, 6, 10, 11月, 酒, ソバ	村中の一家の戸主, 代参5人	湯殿山	『日本民俗地図』72
65	東村山郡中山町	長崎	八日講	1, 4, 8, 12月8日かねで念仏	部落の戸主	湯殿山	『日本民俗地図』72
67	東置賜郡高島町	二井宿			15歳, 終えると若者組	月山, 湯殿山	『置賜の民俗』3, '69
68	西置賜郡坂田町		出羽三山講り	教注の法印が5月に配札, オタマシ		大日寺経由	『置賜の民俗』5, '72
69	米沢市	三沢部	オヤイヤリ			出羽三山	『置賜の民俗』6, '74
70	南陽市	漆山	湯殿山講		15歳の初参り	大日寺経由 羽黒へ坂ける	『置賜の民俗』7・8 '76

きずとこらもある。留守中の家族は、川ばたにぼんでんを立てて水ゴリをとった。ぼんでんに星がつくと、無事お山をかけたと安心したものであるという。十二月七日の湯殿山の年越の晩は村人が行屋に集まり、サンゲサンゲの拝詞を唱え、近くの湯殿山碑にお参りした。湯殿山は五穀豊穡の作神として、また祖霊の還る山として崇められている。御神体の近くの岩肌死者の戒名を記した紙を貼り、これに水を注ぐ岩供養の風習がある。また、月山に対し、昔は「東のお山」と呼ばれた秋田県境の神室山の信仰もみられた。神室山にも月山と同じく十五歳の初参りと温泉祭祀の慣習があった。^⑧

最上地方の出羽三山信仰には「十五の初参り」という習慣があった(表8)。これは、十五歳になった男子が出羽三山登

拜に同行するという信仰形態であり、岩木山の初参りと同じく、成人儀礼としての登拜と考えられる。これはいわば社会的強制であり、共同体的結合の強い信仰形態である。

また、出羽三山信仰と関連する行事としてサンゲサンゲ行事がみられる。これは八日講と呼ばれるところもあり、村落における三山講の集会であるとみなされる。すなわち、一家の主人や三山参詣者が旧暦十二月一日から八日まで行屋にもり、三山の拝詞を唱え、豊作を祈願する行事である。

〔事例62、山形市高瀬〕

出羽三山参詣をお西参り、蔵王山参りをお東参りとも称した。男子が十五歳になると初参りといつて、まず湯殿山に参詣した。参る一週間前から水ゴリをとり、家族までが肉や魚を一切食わずに身を清め、また貯めておいた一銭銅貨を塩で洗ってサラシの袋に入れてサイ銭にした。出発する夜はどこかの家に皆で集まって、ぼんでんを刻み、初参りの人は三本、行ったことのある人は一本を屋根の上に立て、家中皆で声高く「やーまのかーみは三社のごーんげん」と何回もくり返しお経をあげて夜中に出発した。翌朝方にはお山に着いてお参りをしたが、その時間頃には家のほうでも「良いお山をお参りできますように」と皆で村社にお参りしたものだ。どこの村にも先達がいて、一切を世話してくれた。

村山地方の出羽三山信仰も、最上地方と同様に、「十五の初参り」の形態がみられる(表8)。上山出身の齋藤茂吉も十五歳の時に出羽三山に登拜している。それに対し、村落での講の集会は八日講と呼ばれ、戸主層が中心の行事となつて二重構造を有している。

〔事例66、米沢市六郷町一漆〕

置賜地方では飯豊山をお西山といい、十三〜十五歳、後には二十歳までに三回ほど登拜することにより、一丁前として認められる習俗があった。一丁前になるとオシモ(出羽三山)に講中で参った。行屋のある家は旧家で行屋では向かって右側の炉を中火、左側を上火(浄火)といい、中火は飯豊山登拜、上火は三山詣りの折と厳別した。飯豊山は「お米の山」とも呼ばれ、三回詣れば

米に一生不自由しないといわれる。オシモマイリは三年まいりといい、ハツヤマの人は三十日間、ニサイヤマとサンサイヤマの人は一週間ほど行屋生活をした。産火は禁物で、産のあった家の人は三山詣りの留守宅にも行けなかった。オシモマイリにも成人登拝的性格がみられるが、多くは一丁前の戸主が行く。^⑤

置賜地方においても、「十五の初参り」という出羽三山の信仰形態がみられるが、南部の米沢付近では福島県境の飯豊山（西のお山）が成人饗礼登拝の対象とされ、出羽三山（東のお山）は一丁前の男が登拝する山として上位に置かれる例がみられる（表8）。

g 新潟県

〔事例71、新発田市〕

男は一生に一度は三山詣りをしなければならぬとか、上方詣りから帰ると必ずオスモマイリをするものといわれ、どうしても行けない場合には大日如来を祀る乙宝寺に詣った。明治四十年頃から昭和十年頃まで注連寺住職は毎年下越地方を布教に回り、それと前後して大日坊住職も新潟市から北越後を巡回したという。注連寺は地区のオオヤケ、大日坊は大衆の教化を主としたともいう。両寺とも北蒲原の宿泊者がもとは多かったが、注連寺は大日坊の二倍はあったという。大正期から羽黒の檀所院が進出した。檀所院株は明治二十年頃、手向平門前の大塚氏と聖之院の関東道者引だった星野氏（養清坊）が引き受け、養清坊は北蒲原郡、大塚氏は新潟市と中・東・西・南蒲原郡の株を取得した。湯殿山丑年縁年には千人から紙の寄進を受け、千枚梵天を作って湯殿山に納めきたという。元海寺には女性を主とした大日講中があった。^⑥

新潟県では、出羽三山参詣は「オシモマイリ」と称され、上方参り（伊勢参り）と対置され、一生に一度は参るものとされた。ただし、県南部では戸隠信仰等と競合し、^⑦分布は希薄となる。また、女性の羽黒山参りや大日坊参りも盛んである（表9）。

一方、佐渡では分霊である羽黒山神社への女子の「十三まいり」がみられ、⁹⁰上述の乙宝寺参りとあわせ、青森、福島県の事例と同様に、勧請した分霊への参詣という信仰形態が存在する。

h 茨 城 県

〔事例 80、高萩市下大能塚鐘〕

湯殿山譚は男たちの集まりで、五〜六年おきに参詣に行く。譚は各戸から一人で現在十一名になっている。参詣費用にあてられために、譚中の者に種ミミを貸していた。十月二十八日には掛軸をかけて一晩飲み明かす風習がある。身を清めるために、数日前か

表9 新 潟 県 に お け る 信 仰 事 例

事例	市 町 村	地区名	譚の名称	譚日と行事	譚員と参詣者	参詣場所と時期	出 典
72	岩船郡朝日村	高 根	オスモヤイリ	芳賀徳丸が年始に配札	家に不幸があれば翌年にくりこし	鉄道開通前は大日坊、後は羽黒經由	『朝日村の民俗』'77
73	岩船郡朝日村	猿 沢	羽 黒 譚	盆前に羽黒の御厨が配札と勧誘	68人1組で3人代参	7月20日〜9月20日の間	『朝日村の民俗Ⅱ』'78
74	岩船郡因川村	金 丸	湯 殿 山 譚			盆の13〜15日	聞き取り '80
75	岩船郡神林村	宿 田	おすも譚			月 山	『日本民俗地図』'72
76	豊 栄 市	内 沼	湯 殿 山 譚	春と秋に譚、掛図と石碑にボンテン			『福島県』'70
77	東蒲原郡津川町	津 川	八 日 譚		代 参	出羽三山	『日本民俗地図』'72
78	加 茂 市	上大谷	湯 殿 山 譚				『日本民俗地図』'72
79	阿 津 市		羽黒山詣り		女子の13歳の初参り	阿津市羽黒山神社	湖地佐三郎 '78

表10 栃木県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
82	河内郡上河内村	今里		旧10月7日祭礼		今里羽黒神社	大島延次郎 '54
83	河内郡上河内村	網島	羽黒講	2月10日にイネの早刈りを奉納			『栃木県民俗地図Ⅱ』 '79
84	塩谷郡塩谷町	小始	羽黒山講	おれとユズを買い近所に配る		11月7日 今里羽黒神社	同 上
85	那須郡那須町	那須沢	羽黒山講	講宿は役員老	世帯主世襲で地区全部の20人		同 上

ら水を浴び、帰ってからは参拝記念碑を建てたり、氏神に報告したりしたという。^⑨

茨城県における出羽三山信仰は南東北に比べれば、はるかに希薄となる。これは前章で述べた水戸藩の宗教政策や、筑波山講、加波山講、三峰講等の関東各地の山岳信仰と競合したことも一因であろう。^⑩

一方、三山碑の中には、碑文に坂東・秩父・西国巡礼などが共に刻まれている例がしばしばみられ、出羽三山参詣がこれらの巡礼と同じく回國巡礼地として認識されていたことが指摘できる。^⑪

i 栃木県

〔事例81、塩谷郡塩原町帯根遅野沢〕

湯殿山講は男性の講で、丑年に宿に集まり、ごちそうを食べる。代参人（申し出）二人を出し、行く前に行屋（明治頃まで）で身を清めた。^⑫

栃木県における出羽三山信仰も茨城同様かなり希薄である。男体山講、三峰講、加波山講などの山岳信仰と競合したこ

とが考えられる。^⑭羽黒講がみられるが(表10)、多くは河内郡上河内村羽黒山神社に参詣する講であり、これも勧請した分靈に参詣する信仰形態である。

j 群 馬 県

〔事例86、邑楽郡千代田村〕

出羽三山を信仰する講が上五箇に盛んで、愛宕神社におこもりして行をした。組ごとの組織で十三軒ほどだった(大正十四年)。毎月三回のお日待、年二回大日待をし、大寒の一週間は寒行をし、五年に一回位は大々的に行をした。手向の木村武松という先達が昭和二十一年まで来て布教していた。安政四年に吉永紋十郎が広照坊という称号を羽黒山別当からもらっている。この吉永家に上五箇の大本部があり、先達の家には神棚に幕を張り、ふつうの女子供は入れなかった。戦前は四ツ足の肉類は食はず、人から頼まれると祈禱して神様のお告げをつけてやった。このさんやま講は男だけの講で五十〜六十歳位の年輩の信心者が十六〜十七人加入していたが、終戦時に終りになった。また、今から五十年ほど前まで、檜内に大日講があった。これは出羽三山の信仰で信者が集まって行をしたという。行の間は女の煮た食物は食べなかった。^⑮

群馬県においても、三峰講、榛名講、御岳講などと競合するためか、出羽三山信仰は希薄であり、県南東部の前述の事例がみられるのみである。

また、桐生からの参詣を記録した江戸時代の三山道中記が残されており、往路は弥彦へ寄って日本海側を通過して出羽三山に参詣し、帰路は松島へ寄り、福島、宇都宮を経由して帰参するという名所旧蹟を遍歴する回国巡礼的な旅であったことが知られる。

表11 埼玉県、神奈川県における信仰事例

事例	市町村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時期	出典
89	人間郡越生町	小杉	出羽三山講	弘化2年の石碑が残る		今はない	『日本民俗地図』72
107	足柄上郡南足柄町	三竹	三山講		睦・わんか20人分あった		『日本民俗地図』72

k 長野県

〔事例87、岡谷市湊小坂〕

三山講は七十戸ほどで組織され、九月二十八日を例祭としてお日待をしている。以前は祭りのあと、諏訪湖の湖中にボンデンをたてる行事があった。^⑧

信濃・上野両国では天明の浅間山噴火以降、他国の霊山参詣を禁じ、浅間山の神を祀ったといわれる。^⑨ そのため、出羽三山参詣者数は激減し、羽黒派修験や巫女も他派に転じたという。明治二十年頃に長野県一円を三山敬愛講社に再編成しようとする試みもなされたが失敗に終わった。^⑩ 前述の諏訪の三山講は、あるいはそのなごりかもしれない。また、元禄の頃は上伊那郡より三山参詣があったという。^⑪

1 埼玉県

〔事例88、川越市大袋宿西〕

月山講は三月末か四月初め頃に寄り集まって御飯を食べる。^⑫

埼玉県においても、出羽三山信仰はほとんどみられない（表11）。埼玉県には、御岳講、大山講、三峰講、富士講などの山岳信仰が盛んであり、出羽三山信仰はあまり浸透しなかったようである。

m 東京 都

〔事例90、葛飾区〕

遠く出羽三山を信仰する講中もあった。現在でも区内各地の道路の分岐点や社寺の入口には出羽三山や富士山等の記念塔がある。^⑧ 都内においても、旧農村部にはこのような出羽三山信仰のなごりがみられるが、江戸城下では、注連寺と手向玄良坊が出開帳を行なったにもかかわらず、^⑨ 信仰のなごりを見いだすことはできない。江戸町民には富士講や大山講は普及したが、出羽三山信仰は浸透しなかったようである。

n 千葉 県

〔事例91、千葉市千葉寺〕

奥州参りは昔は五十歳すぎ、今は四十歳すぎくらいから行く。出羽三山参詣者を行人と呼び、行人になると八日講に参加できる。行人の最大の行事としてボンデン供養があり、出羽三山から持ち帰ったボンデンを塚に埋める行事であつて、その際に建碑する。行人が死ぬと三山参詣の際の行衣を着せ、行人仲間とボンデンを作つて家と墓前と供養塚に供え、三山拝詞を唱えてとむらうボンデンハギを行なう。千葉寺には手向の橋本坊が二年に一度、冬配札に来る。七月初めに世話人が参詣者を募集し、七月二十日頃から参詣に行く。今は講中は増加して百軒近い。四十〜六十歳の人が八日講を開く。昔は四つの町内ごとに集まつたが、今はいっしょにする。八月十七日から三日間、講中で行をする。^⑩

千葉県は関東地方において最も出羽三山信仰が盛んであり(表12)、現在も手向の宿坊から檀回に来る地区がかなり存在する。^⑪ 千葉県において、出羽三山信仰が濃密に分布するのは「七里ヶ法華」と称される日蓮宗地帯の縁辺部においてである。したがって、日蓮宗勢力に対抗する手段として出羽三山信仰を受容し、しかも近隣の村落と「付きあい村」^⑫として連

表12 千葉県における信仰事例

事例	市 町 村	地区名	講の名称	講日と行事	講員と参詣者	参詣場所と時辰	出 典
92	木更津市	牛込	八日講	1, 4, 8, 10月8日	行人の講		『日本民俗地図』'72
93	市原市	姉崎川岸	三山講	年1回	日蓮宗以外は可		同 上
94	市原市	菊間	八日講		男の年寄り		同 上
95	長生郡睦沢村	大上	三山講	三山碑あり			同 上
96	市原市	高滝	八日講			今はない	同 上
97	千葉市	平山	奥州参り (大日講)	毎月8日東光院で3月 には手向長存坊	40歳前後の人が中心		池上広正 '58
98	木更津市	金田		1月7日 ボンデン立 て	若者組に加わる者		『生きている民俗探訪 千葉』'78
99	八千代市	神野	奥州講	講員で別に葬式	同行者 10人位		『神野の民俗』'76
100	市原市	不入斗	三山講		一生に一度は登拝する もの	手向養清坊	宮本袈裟雄 '79
101	八千代市	勝田	奥州参り			且那をゆずる頃	同 上
102	船橋市	二宮町 三山	奥州参り	3月14日に神宮寺で天 道念仏	男性老人		小西正捷 '76
103	印旛郡四街道町	和良比	三山詣り	2月15日 テントウネ ンブツ	詣った人たちはボンデ ングミ		川端豊彦 '61
104	千葉市	宮野木	八日講	3月8日 天道念仏			同 上
105	木更津市		八日講	毎月8日	行人で組織	4月8日 三山さんの 日	岡倉捷郎 '78

帯したとみることができよう。

講は奥州講、さんやま講などと称されるが、宮本が指摘したように、代参型の講はほとんどみられず、同行仲間型の講が多くみられる。つまり、三山参詣をすませた行人のみで講が形成されるのである。講員は老年層が多く、池上や柳川が指摘したように、出羽三山参詣は老年層へのイニシエーションとしての役割を果たしている。たとえば、八千代市勝田では伊勢参りも三山参詣へ同じく一生に一度は行くものとされ、戸主になる前の成人が参宮する。三山参詣が老年層へのイニシエーションであるのに対し、伊勢参りは戸主層へのイニシエーションとして位置づけられている。また、成人儀礼の登拜としては「十三の大山まいり」が元服登山と称され、安房郡や埼玉、神奈川県から相模大山に参詣した。

また、三山講の講員が死んだ時には、本葬の後に講員のみで別に葬儀を行なう。そして、行人墓と称する、一般とは区別された墓が建てられ、行人は死ぬと神になるといわれる。行屋での行の際にも、特殊な行ことばが使われるなど、同信的結合が非常に強い信仰形態が千葉県の出羽三山信仰の特徴となっている。

明治期の出羽三山参詣記録が散見されるが、いずれも名所旧蹟を巡歴する周遊の旅となっている。

○ 神奈川 県

〔事例106、横浜市港北区鴨居〕

三山碑は横浜市内でも鶴見、神奈川、港北、保土ヶ谷、戸塚の各区内にみられるが、講はわずかに港北区鴨居町に残存するのみである。現在二十一戸が講員で、正月、五月の八日と十二月の冬至祭の他に、四月八日の山始め、九月八日の山終いがあり、この二回と葬式の時のみ梵天を作る。出羽三山登拜の際は林光寺の不動堂で、昔は一週間、現在は三日間オコモリをする。羽黒山では長伝坊に泊まる。昔は羽黒山正徳院直講鴨居大丸講中と書いた大きな木の札を持っていった。長伝坊は毎春配札に来る。三山登拜者が死ぬと、講員は葬儀に参列し、梵天を山始め山終いの際に石碑の所に立てると同じ形式で立てる。

神奈川県においても、このような千葉県に類似した信仰形態が報告されている。東京湾を渡って伝播の可能性も考えられるが、神奈川県においては出羽三山信仰が千葉県ほど盛んであるとはいいがたい（表11）。

以上、各県ごとに信仰形態を検討したが、次章ではこれらを信仰圏に位置づけたい。

- ① 柳川啓一「出羽三山周辺の三つの地域共同体において、信仰形態が相異なることを、講が共同体的結合か、同信的結合かどちらに近いかで種々の段階があり、それが講の多様性となって現われると説明した。柳川「村落における山岳信仰の組織」宗教研究141、昭30。
- ② また柳川と池上広正は千葉県において出羽三山信仰が老年層へのイニシエーション（加入儀礼）の役割を果たしていることを指摘した。柳川啓一「出羽三山信仰と老年層」人類科学11、昭34。
- ③ 池上広正「出羽三山の信仰―千葉市平山に於ける―」社会と伝承2―3、昭33。
- ④ 民俗学の文献には次のようなものがある。宮本毅彦「関東の出羽三山講―千葉県の三山登拝習俗を中心にして―」（宮田・宮本編『日光山と関東の修験道』名著出版、昭54）。
- ⑤ 岡倉捷郎「関東における出羽三山信仰―その分布と三山講の性格・諸相―」まつり38、昭56。
- ⑥ 文化庁編『日本民俗地図Ⅲ（信仰・社会生活）』国土地理協会、昭47。
- ⑦ 新城常三「新稿社寺参詣の社会経済史的研究」瑞書房、昭57。
- ⑧ 『青森県の民間信仰』青森県立郷土館、昭51。
- ⑨ 前掲第二章註②参照。
- ⑩ 『水沢市史6』昭53。
- ⑪ 紺野博夫「東北地方農村における羽黒三山参詣に関する一考察」岩手史学研究23、昭31。
- ⑫ 楨昭一「山形の銅町」地理26―6、昭56。
- ⑬ 前掲註②参照。
- ⑭ 昭和55年の筆者聞きとりによる。
- ⑮ 長井政太郎・小野芳次郎「六十里越街道と宗教聚落」地理（大塚地理学会）5―2・3、昭17、によれば、昭和4年月山参詣者数は、山形、福島、宮城、新潟、千葉、青森、岩手、秋田、茨城、群馬、東京、栃木の順となる。
- ⑯ また柳川啓一「出羽三山の宿坊について」宗教研究150、昭31、によれば、昭和29年の月山登山者数の県別順位は、山形、宮城、福島、千葉、新潟、岩手、栃木、秋田、東京、北海道、青森、茨城となっている。
- ⑰ 前掲註②参照。
- ⑱ 『秋田県史2近世編上』昭39、『秋田県史3近世編下』昭40。
- ⑲ 『河南町誌上』昭42。
- ⑳ 文部省調査局宗務課『教派宗派教団便覧』昭34、によれば、大和教は塩釜市香津にあり、昭和6年湯殿山祈禱所、昭和21年大和教となった。大和教団は仙台市北一番丁にあり、昭和7年神道実行教湯殿山神社、昭和32年大和教団となった。
- ㉑ 文化庁『宗教年鑑』昭和53年版では、大和教は教会26、布教所32、信者八万余、大和教団は布教所38、信者六万余である。
- ㉒ 前掲第二章註②参照。
- ㉓ 『猪苗代町史民俗編』昭54。

- ⑬ 前掲註②参照。
- ⑭ 会津若松市教育委員会編『舟子と桑原―大川ダム水没部落民俗調査報告書』昭48。
- ⑮ 『安積地方の民俗―新藤都市指定地区民俗資料調査報告書』昭42。
- ⑯ 『三春町史6民俗』昭55。
- ⑰ 秋山恒「出羽三山信仰についての一考察」郡山地方史研究14、昭57。
- ⑱ 『いわき市史7、民俗』昭47。
- ⑲ 『郡山市史7、民俗』昭44。
- ⑳ 岩崎敏夫「本邦小祠の研究―民間信仰の民俗学的研究―」昭38、昭52復刻、名著出版。
- ㉑ 鶴岡市民田公民館編『民田部落誌』昭54。
- ㉒ 戸川安章「羽黒山麓における農耕儀礼と燬靈信仰」日本民俗学10、昭51。
- ㉓ 真龍社編『出羽三山の信仰』昭52。
- ㉔ 岩崎敏夫「モリノヤマ信仰の考察」東北学院大論集（歴史学・地理学）12、昭57。
- ㉕ 戸川安章『修験道と民俗』岩崎美術社、昭47。
- ㉖ 大友義助『新庄の石仏―路傍に生きる庶民の信仰―』新庄市教育委員会、昭49。
- ㉗ 大友義助「山形県北部地方のサンゲサンゲ行事について」日本民俗学88、昭48。
- ㉘ 山形市高瀬地区連合老友会編『山形市高瀬の伝承―見たり聞いたり』昭53。
- ㉙ 松坂俊夫『やまがた文学風土誌』東北出版企画、昭50、によれば、斎藤茂吉が、明治29年、15歳の時の湯殿山参詣の印象が、『念珠集』に「初詣」と題し収められている。
- ㉚ 佐野賢治「山岳信仰の重層性―羽前置賜地方「高い山」行事の周辺

- ―」（千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂、昭55）。
- ⑳ 『新発田の民俗下』昭47。
- ㉑ 拙稿「観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌」人文地理33―5、昭56。
- ㉒ 潮地悦三郎「佐渡の金北山参りと羽黒山参り」日本民俗学119、昭53。
- ㉓ 今瀬文也「茨城県における講についての一考察」茨城の民俗11、昭47。
- ㉔ 前掲第三章註⑨参照。
- ㉕ 前掲註⑨参照。
- ㉖ 木塚治雄『さしまの民俗』拙書房、昭52、によれば、猿島郡境町に、左の銘を有する天保9年の供養塔が存在する。

羽黒山	坂東
湯殿山	西園秩父
月山	四国

- ⑬ 『栃木県民俗地図Ⅱ』昭54、の調査原票（栃木県立博物館所蔵）による。
- ⑭ 『栃木県民俗地図Ⅱ』昭54。
- ⑮ 栃木県神社庁編『栃木県神社誌』昭39。大島延次郎「羽黒神社の梵天祭」下野史学5、昭29。
- ⑯ 群馬県教育委員会編『千代田村の民俗』昭47。
- ⑰ 大島久男「湯殿山月山羽黒山道中記」上毛史学8、昭33。
- ⑱ 前掲註②参照。
- ⑲ 大島延次郎「奥三山参詣の史的研究」社会経済史学9、昭14。
- ⑳ 前掲註⑨参照。
- ㉑ 前掲註⑨参照。
- ㉒ 『川越市史民俗編』昭43。

⑤③ 『葛飾区史上巻』昭45。

⑤4 比留間尚「江戸の開帳」（西山松之助編『江戸町人の研究2』吉川

弘文館、昭48）

⑤⑤ 柳川啓一「出羽三山信仰と老年層」人類科学11、昭34。

および、昭和55年の筆者聞き取りによる。

⑤⑥ 対馬郁夫「下総地方の出羽三山信仰」歴史手帖8―5、昭55。

同「安房地方の出羽三山信仰」歴史手帖9―3、昭56。

⑥⑦ 菊地利夫「七里ヶ法華」の歴史地理学的研究」（歴史地理学会編『文化圏の歴史地理』古今書院、昭48）。

⑥⑧ 前掲註①の柳川と池上によれば、石碑建立の際に近隣の村々からみ

こしや祝儀が出るという。

五 出羽三山信仰圏の設定

本章においては、前章で検討した出羽三山信仰の諸事例について、いくつかの指標により、比較し類型化することから信仰圏の設定を試みたい。

まず、典型的な同心円状の分布を示す指標として、参詣者の年齢をあげることができる（図5）。すなわち、出羽三山周辺の山形県下では「十五の初参り」のような、若者の成人儀礼としての参詣形態が存在する。また、隣接諸県では戸主層を主とする成年層の参詣が中心となる。さらに、岩手県三陸地方や新潟県、福島県浜通り地方、関東地方においては、出羽三山参詣は一生に一度は行くものとされ、高齢者の参詣が主となる。① もちろん、出羽三山参詣には多額の諸経費と相應の体力が要求されるため、体力や資金の十分でない青少年には長旅は困難であり、したがって、距離が遠くなるほど参詣者の年齢が上昇するのは当然の結果であるといえよう。しかし、単に参詣者の年齢が上昇するだけでなく、村落に存在した年齢階梯制に対応した形で、出羽三山参詣はイニシエーションの役割を果たしていたことが想定される。

⑤⑨ 前掲註①参照。

⑥⑩ 前掲註①参照。

⑥⑪ 前掲註①の宮本論文参照。

⑥⑫ 岩科小一郎『山の民俗』岩崎美術社、昭43。

⑥⑬ 岡倉捷郎「上総木更津の出羽三山信仰」あしなな19、昭53。

⑥⑭ 対馬郁夫「出羽三山行人の墓制と葬送儀礼」市原地方史研究10、昭55。

⑥⑮ 前掲註①の宮本論文参照。

⑥⑯ 森操「明治初年における出羽三山参拝記録」上総市原1、昭51。

⑥⑰ 飯白和子「出羽三山信仰とムラの人々―旧湖北村を中心に―」我孫子市史研究6、昭57。

⑥⑱ 大谷忠雄「鴨居の三山講と葬制(1)・(2)」民俗41、42、昭35。

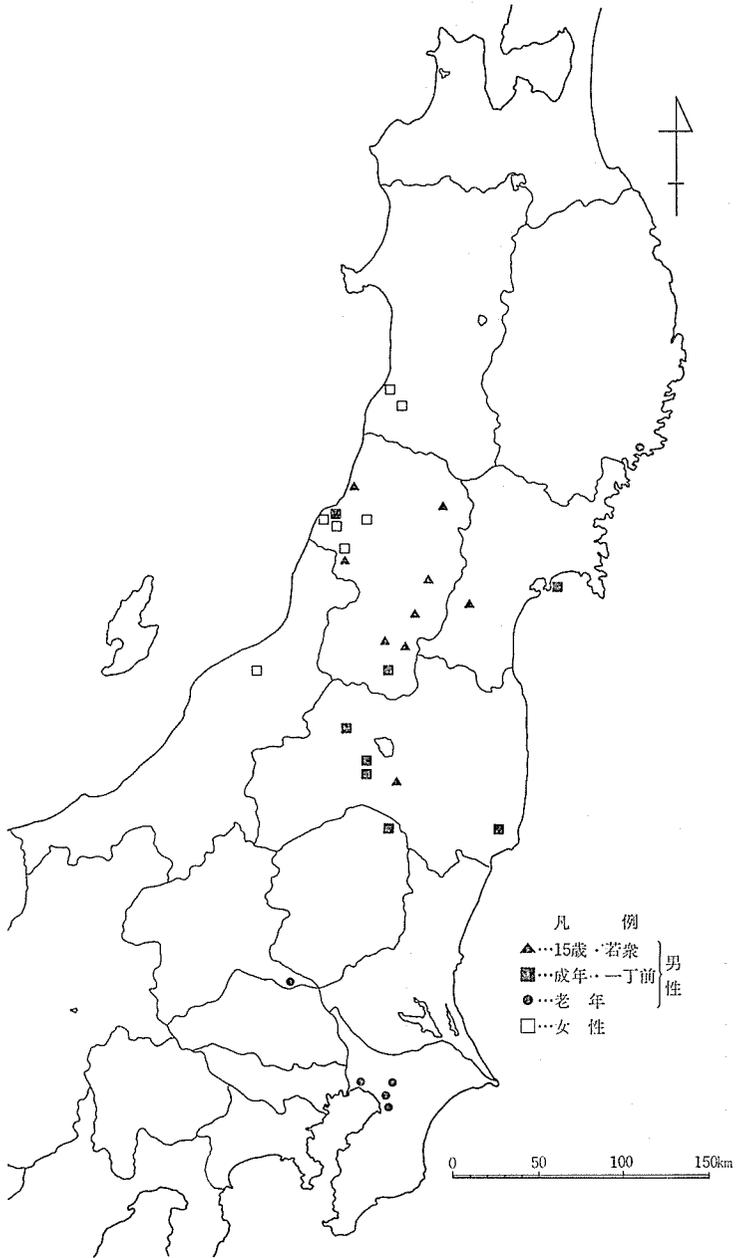


図5 参詣者の年齢と性別

次に、柳川が提起した同信的結合と共同体的結合との関連があげられる。たとえば「十五の初参り」は男子が十五歳になれば、出羽三山への参詣が義務づけられるという通過儀礼の形態をとり、講の有無にかかわらず、きわめて共同体的結合の強い信仰形態であり、いわば社会的強制である。

それに対し、任意加入の代参講、すなわち、いくばくかの講金を掛けて毎年講員のうちの数人を選んで代参させ、全員が参詣を果たすと講を解散し再編成するという信仰形態においては同信的結合が強まる。ただし、講の集会和村の政治経済的な会合とが結びついた場合には共同体的結合が強まる。また、任意加入の代参講でも、多くの場合は家単位の加入となるため、留守中の精進などには共同体的結合もみられる。

一方、同行仲間型の講、要するに出羽三山に参詣することによって講員の資格が得られるという信仰形態の場合は、最も同信的結合が強いといえる。

これらの信仰形態の分布はミクロにみれば、柳川が指摘したように、山形県下においても多様な展開がみられるが、マクロにみれば、同心円状の分布を示すといえる。すなわち、出羽三山の周辺には共同体的結合の強い信仰が存在し、近隣諸県には中間的な代参講型の信仰、遠隔地には同信的結合の強い同行仲間型の講の信仰が存在する。

また、出羽三山からの距離関係で把握できる指標として、出羽三山から勧請した分霊の分布があげられる。青森県三戸郡の月山参りや、福島県の信夫三山参り、新潟県の乙宝寺参り、栃木県河内郡の羽黒山神社参りなどは、時間的・資金的に出羽三山参詣が困難な場合に、勧請した近在の分霊に参詣するというものである。

以上の各指標から、同心円的な信仰圏を設定することが可能となる。まず、青少年層の出羽三山登拝がみられ、共同体的結合の強い信仰形態がみられる山形県下（出羽三山から半径五十km以内）を第一次信仰圏に措定しうる。

次に、戸主層を主とする成年層の参詣が中心で、代参講形式の信仰形態がみられる圏域（半径五十～百五十km）を第二次信仰圏に措定しうる。

さらに、老年層の参詣が主となり、同行仲間型の講の信仰形態がみられる圏域(半径百五十～三百五十km)を第三次信仰圏に措定しうる。

また、出羽三山から勧請した分霊に対する信仰の分布は第二次信仰圏と第三次信仰圏の境界領域に多くが存在する。すなわち、毎年代参者を送ることが困難な距離の場合に、分霊への参詣が行なわれるといえよう。

一方、第三次信仰圏の外側からも、時に出羽三山の名声を伝え聞いた参詣者が訪れることもある。手向では、このような参詣者を「遠国」と称し、何らかの結縁のある宿坊にその処遇をゆだねた^④。しかし、その人数はごく少数であり、あえてこれら未組織の参詣者を対象に信仰圏を設定する必要もなく、単に圏外とみなせばよからう。また、現代の観光客も信仰圏外から、多く出羽三山を訪れるが、信仰心の乏しい観光客についても、同様に圏外とみなすことができる。

以上、第一次～第三次にわたる出羽三山信仰圏を設定したが、前章で検討したように、各地における信仰受容の基盤の差異や、山岳宗教集落の布教の方向性等々により、同一の信仰圏内にも信仰形態の地域差が存在する。したがって、さらに信仰圏内における地域類型を求める試みを続けたい。

まず、第一次信仰圏においては、最上、村山、置賜地方には「十五の初参り」や八日講のような共通する信仰形態がみられ、同一類型とみなすことができる。しかし、庄内地方では「十五の初参り」はみられず、羽黒山の祭祀に若衆が参加する形をとる。また、内陸部にはみられない女人講も存在するため、別の地域類型とみなさなければならぬ。したがって、第一次信仰圏内には二つの地域類型が存在する。

次に、第二次信仰圏内においては、まず「最上詣り」という独特の信仰形態を示す岩手県、宮城県北部がひとつの類型となる。また、女人講の盛んな日本海側の秋田県南部と新潟県北部が別の類型となる。残る宮城県南部と福島県がもうひとつの類型となる。

最後に、第三次信仰圏内において、まず同行仲間型の講が存在する青森県南部地方がひとつの類型となる。次に信仰の

希薄な地域類型として、青森県津軽・下北地方、秋田県北部、東京都、埼玉県、長野県、新潟県南部が一括される。さらに回國巡礼的出羽三山参詣のみられる北関東が別の類型となり、講が葬送集団ともなる千葉県と神奈川県がもうひとつの類型となる。

以上のように、出羽三山の信仰圏は第一次、第三次にわたる圏域が設定され、さらに各圏域内にくつかの地域類型が設定される。

- ① 宮本常一『野田泉光院―旅人たちの歴史―』未來社、昭55、によれば、江戸時代においては山岳参拝に多額の費用が必要とされたが、その中でも出羽三山はとりわけ高額の参詣費用を要したことが指摘されている。また、前掲第四章註⑦においても、参詣費用に関する考察
- ② 前掲第四章註①参照。
 ③ 前掲第四章註①参照。
 ④ 前掲第三章註①参照。

六 お わ り に

前章で出羽三山の信仰圏を設定したが、最後に、このような同心円的構造が存在する理由について考察を加えたい。

ここでまず、牧の提示した山岳の序列概念に関して検討したい。^① 牧は、人々が山に対して、自分の持ち山（山林）↓部落の山（共有林）↓地域の山↓地方の山↓日本の名山という序列意識を持っているとし、山岳信仰を論ずる場合、その山岳を人々がどのような序列においているかということが重要な問題であると主張している。

このことは、いかえれば山岳に対する空間認識の問題であるといえる。自己の生活空間からの距離に応じて、山岳に対する認識は変化する。すなわち、山岳宗教が、その山岳を中心とする同心円的信仰圏を有するのと同様に、信仰を受容する村落の側においても、村落を中心として、同心円的な山岳に対する空間認識が存在することが想定される。村落の近辺の山岳は成人儀礼に登拝する山として認識され、遠隔地の山岳は一生に一度は参詣すべき山として認識される。

たとえば、ターナーのいう巡礼地の周辺性^②に関して、彼が主張するように巡礼地自体の立地が周辺的であるとみるよ

りは、むしろ参詣者の自己中心的な生活空間からみて、巡礼地が周辺性を有していると考えられるほうが妥当であろう。したがって、周辺性の強い遠距離参詣ほど、参詣体験者は村落においてより高い地位にあると認識される。

このように、村落において信仰を受容する人々の空間認識としての信仰圏の存在が想定される。山岳宗教集落の御師の布教が一定であっても、出羽三山からの距離に応じて、村落において信仰を受容する人々の出羽三山に対する認識が変化し、それに対応して出羽三山の信仰圏が形成されているといえよう。つまり、山岳を中心とする信仰圏と村落を中心とする信仰圏とは互いに対応しながら成立していると考えられる。

ただし、本稿においては各地における出羽三山信仰の諸形態の比較が中心であったため、個々の村落を中心とする信仰圏の中における出羽三山信仰の位置づけに関しては考察が不十分であった。この点については今後の課題であり、インテンシブな村落調査を行なって、個々の村落を中心とする信仰圏の中に出羽三山を位置づけていくことが必要とされる。

また、この村落を中心とする信仰圏の調査研究を重ねていくことから、山岳宗教相互間の階層的な分布構造が明らかになってくる。この面において、従来、商業地理学や交通地理学で積み重ねられてきた中心地理論との接点が求められるといえよう。

① 前掲第二章註⑥参照。

② ヴィクター・ターナー、梶原景昭訳『象徴と社会』紀伊国屋書店、

【付記】

小稿は、昭和五十七年四月の人文地理学会第百四十四回例会において発表した内容を加筆修正したものである。現地調査の際および発表の折に御教示いただいた諸先生に深謝いたします。

and fully utilized.

On the sphere of religion in *Dewa-sanzan* 出羽三山
from the geographical point of view

by

Michiaki Iwahana

The religion in Dewa-sanzan is spread in all eastern parts of Japan, where exist stone monuments, branches of shrines and *Sankei-ko* 参詣講 (religious associations for pilgrimage). This article, which follows the former one about communities of mountainous religion in case of Dewa-sanzan and its sphere, shows the geographical structure by collecting examples of the religion in Dewa-sanzan among the local histories, folk materials, maps and on-the-spot investigation, and finding some types.

When the religious forms in each place are compared, the threefold sphere can be set up as a main mark. It comes clear that the structure of the religion in Dewasanzan takes the form of concentric circles. Furthermore, within each sphere some regional types can be seen from the examination of the local differences of the religious forms.